

～突撃★ドメーヌ最新情報！！～

◆VCN°15 ジェラルール・デスクランブ

生産地方：ボルドー

新着ワイン 1 種類♪

AC ボルドー シャトー・ルネッサンス エルヴェ・アン・バリック 2014 (赤)

父ジェラルールが仕込んだバックヴィンテージの再入荷！ 3年前の初リリースの時は、野趣味溢れる凝縮した果実のコクが前面に出ていたが、3年熟成を経て果実が幾分かなれ滑らかになっている。瓶詰から5年経つが、酸がある分まだまだ熟成に耐えるポテンシャルを感じる。ワインは、果実がこなれた分、中に隠れていた滋味深くほんのり苦みのあるミネラルが姿を現し、染み入るような酸とキメの細かいタンニンと共に複雑なハーモニーを奏でる！ 血肉のような上品な野性味の中にしめやかな果実の甘みと染み入るような酸があり、赤ワインでじっくり煮込んだ牛肉はもちろんジビエ料理とも良く合いそうだ！ ちなみに、開けて半分残ったまま5日間経ったワインを飲み返したところ、全く味が落ちていなかったことには驚いた！ かつてジェラルールが言っていたように、酸のある昔ながらのボルドーの底力をあらためて実感し、同時に瓶熟の手応えも感じる試飲となった。

ミレジム情報 当主オリヴィエ・デスクランブのコメント

2014年は、ブドウの収量は例年の50%減と2012年、2013年に次ぐ厳しい年だった。収量の減った主な原因は、天候不良よりもむしろ2013年に襲った雹の影響で、相当のダメージを受けているブドウの枝を、冬の剪定で厳格に調整したことにあった。厳格な剪定の結果、ひとつの樹についたブドウの房は4～8房程度。ブドウの平均収量は30 hL/haと落ち込んだ。天候的には、春のスタートは順調だったが、7月から気温の上がらない不安定な天気が続いた。さらに、8月に入ると今度は雨が降り止まず、ミルデューやオイディウムなどの病気が畑に蔓延し始めた。不幸中の幸いか、私の畑はすでにブドウの房が少なかつたおかげで風通しが良く、さほど大きな被害には遭わなかったが、冷夏の影響でブドウがほとんど熟さず、そのままの天候不良が続くとまったくブドウを収穫できない可能性すらもあった。だが、9月に入り、天候は一転、遅れた夏が戻ってきたような暑さと快晴に恵まれ、そのまま収穫まで夏のような天候が続いたおかげで、ブドウは一気に完熟し、無事収穫までたどり着くことができた！

「ヨシ」のつ・ぶ・や・き

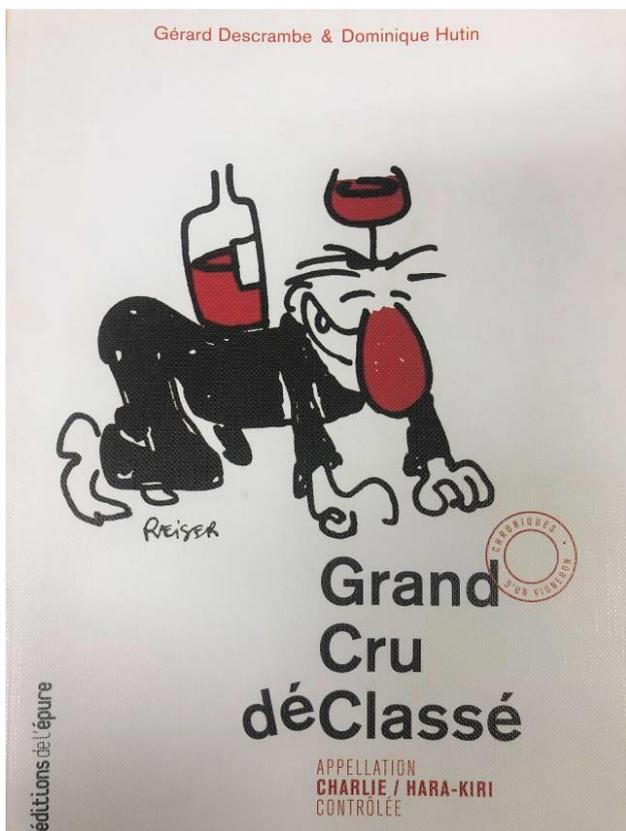
これはデスクランブのシャトーのすぐ前を流れるドルドーニュ川の写真。(写真①) 外は小雨が降っているにもかかわらず川の水位が驚くほど低く、不思議に思ったのでとりあえず車から降りて写真に収めた。そして、シャトーに着いて、さっそくこの疑問をぶつけようとオリヴィエを探したところ、カーヴの前には久しぶりに会う父ジェラルールの姿があった。彼は配管工員と一緒に立ち話をしている。(写真②)



写真① 水位の下がっているドルドーニュ川



写真② 久しぶりに会う父ジェラルール (手前)



写真③ ジェラルールが出版したワイン本
「Grand Cru dé Classé」

ちなみにジェラルールは今、シャトーは息子のオリヴィエに完全に譲りワインは一切造っていない。そのまま隠居生活を静かに送っていると思いきや、2年前に出版した彼のワイン本「Grand Cru dé Classé」(写真③)の大成功のおかげで、コロナ禍前まではフランス各地の講演はもちろん、アメリカ、カナダと講演に呼ばれる忙しい生活を送っていたようだ。ちょうど今回リリースするワインが彼の仕込んだ2014年のバックヴィンテージだったので、情報を聞きながら当時の懐かしい話に花を咲かせたいと近寄ったところ、雰囲気的にどうやらそんな感じではない何か不穏な空気が支配していた…。話の内容を聞いてみると、何やら地下50m深く掘られた井戸の水が、ポンプを回しても上手く上がってこないというトラブルが起こっているようだ。この写真②の中のジェラルールと配管工員の目線の先にある半円状の石のたらいが彼の井戸。中を覗くとほんの僅かに水が底の方に残っていた。通常だとこの石のたらいに溢れんばかりの水が溜まっているそうだが、ジェラルール曰く、今年は日照りの影響で50mの深さの水源も水が枯渇している可能性があるとのこと。ちょうど晩秋を迎え、夜には肌寒さが感じられるこの時期、彼はこの井戸の水を給湯器に循環させ、主に自宅とカーヴを温めるセントラルヒーティングとして利用するのだが、冬に向けて準備をしようとした矢先の深刻なトラブル…。

水の枯渇の話を詳しく聞いているタイミングで、先ほど撮ったドルドーニュ川の写真を彼に見せた。彼が言うには、今年は確かに猛暑と日照りにより川の水位はいつもよりも低いようだ。ドルドーニュ川は大西洋に広がるジロンド川の支流で、多少潮の干満による水位の変化はあるが、それでも今年ほど水位の下がった年はジェラルール自身も見たことがないそうだ。彼が言うには、最初の写真①のブランヌ橋の橋脚にこびりつく苔の部分が通常の水位とのこと。そうだとすると2mくらい水位が落ちている…。実際、低いと思っていたこの水位も、最近の雨のおかげでやっとここまで回復したようで、8月はずっと低い時もあったようだ。彼は、この川の水位の問題を温暖化と農業用水の過度な使用が原因とみている。「ボルドーはかつてに比べて年々猛暑が続き、雨量が少なくなっているのを肌で感じる。もちろん、ただ単に日照りが続くだけで自然に川の水位が落ちることはない。問題は、温暖化により農業や家畜業が年々水を必要としていること。ドルドーニュも川の至る所に農業や家畜の用水路を張り巡らされていて、日照りのたびに川の持つ水量のキャパを超える水を吸い上げるため、年々川の水のストックが減っている。川の水の枯渇問題と井戸の水の枯渇問題は決して無関係ではない」と彼は危機感をあらわにしていた。

その後、トラクターの部品を買いに出かけていたオリヴィエが帰ってきたので、今度は彼に2020年のミレジム情報を尋ねてみたが、彼も同じく今年は日照りの影響が大きかったと語ってくれた。彼曰く、今年はサンテミリオン全域が4月中旬に雹の大打撃を受ける中、デスクランプの畑はなんとか雹を免れブドウの房も多く付き2015年を超える豊作が期待できたのだが、最終的には夏の猛暑と日照りによりブドウに含む果汁が少なく、アルコール度数も15%近くまで上がったそうだ。

近年問題となっている農作物の水不足は、ボルドーだけではなくフランス全土に及んでいる。ボルドーではまさに生き字引的な存在であるジェラルールが、今年の気候は経験したことのないアノマリーだと言っていたのがかなり気になった。(2020.10.23.ドメーヌ突撃訪問より)

※弊社HP「フォト・ギャラリー」より、カラーでサイズの大きい鮮明な写真をぜひご覧くださいませ